

研究会通信第6号をお届けします。台風27号接近の不安定な気象条件で、半ば開催をあきらめていました。しかし、北は札幌の高橋さん、盛岡の藤田さん、南は大雨をついて徳島の兼間さんと小林さんが予定通り参集され、研究報告者を欠くことなく、第19回研究会を無事に開催することができました。10月25日午前中は戸田さんが園長を務める平野の大阪教育大学付属幼稚園を訪問。藤田・諏訪の両名は四天王寺大学の田辺さんと共に、5歳児クラス合同のお誕生日会に参加させてもらいました。6歳を迎えたわが子に向けて語るお母さんの熱い思いが胸に迫りました。26日午前中は四国大学兼間さんの保育者の感情労働の認知度を真っ向から問う修士論文データに活発な論議がわき、午後は保育者養成を中心にした『感情労働』の出版に向けた話し合いに意見が噴出しました。具体的な取り組みについては、京都女子大学の上月さんの方からネット上に種々提起されますので、会員のみなさま、奮ってご参加ください。27日はオプションのワークショップ。ミニ研究会という下相談から生まれた第19回研究会でしたが、19名の参加者を得て、秋の垂れ穂のように、なかなか実り多い研究会となりました。コーディネイト役を引き受けてくださった戸田さん、ありがとうございました。谷町の創作お好み焼き（富紗家）はとてもユニークで美味でしたし、その手前のティファニーのコーヒーもケーキもなかなかでした。たかつガーデン前の中華料理もリーズナブルで美味しかったです！！さすが大阪、お安くて美味しいグルメの旅でもありました。（研究会代表：諏訪きぬ）

世界への発信を！

戸田有一（大阪教育大学）

保育の感情労働研究会の国内での輪はどんどん広がり、研究テーマも広がっています。次は有志で海外です。直近では、来年度、フィンランドのユバスキュラ大学で幼児教育関係の学会があります。

Biennial Meeting of SIG 5

Challenges for the Future in Early Childhood Education

August 25-27, 2014, University of Jyväskylä

<https://www.jyu.fi/edu/en/earli-sig5-2014>

発表申し込みの締切は、2014年の1月です。関西学院大学の橋本祐子先生と、この学会でシンポを企画したいと思っています。テーマは幼児のお片付けの公平分配です。感情労働のテーマに限らず、国境を超えた研究仲間に出会いに行きましょう。新しい学期が始まってすぐの時期なので、学校や園の見学は難しいと思いますが、実践者にも出会えると期待しています。

ユバスキュラから、もしかしたら世界遺産の「ペタヤヴェシの古い教会」にも行ける距離かもしれません。フィンランドの世界遺産は現在7つあり、私は「ヘーガ・クステンとクヴァルケン群島」と「スオメンリンナの要塞」は仕事のついでに行きました。学会会場からはちょっと遠いですが、ナンタリにある「ムーミンワールド」もお勧めです。



第19回研究会に参加して

高橋真由美（藤女子大学）

大阪での第19回感情労働研究会、とても刺激的でした。お世話くださった戸田先生、ありがとうございました。午前中は兼間さんのご報告に対して、多くの感想や意見が出され、私の現在の研究にも近い領域であったので、自分の研究のことを考えつつ、みなさんのご意見を伺っていました。午後からの第2弾出版の話合いも、実習指導をしている身としては、とても関心のある分野です。議論をしているうちに、私も実習に行く学生に「笑顔で明るくね」「服装はこんなのが良い」などの指導をしています。表面的なことを伝えて満足してしまっている自分がいるのではないかと、そして、そのことが、「笑顔で明るくできない学生」に「自分は保育者に向いていない」と思わせるようなことを助長してしまっているかもしれないと思ったりしました。もちろん、学生のことを心配して指導していることなのですが、それよりも子どもの前で自然と笑顔になることができる学生を育てることのほうが大切なのだということを改めて思いました。その方法論は、これをすれば良いといった簡単なものではないと思いますが、養成に携わっている以上、このことは、ずっと追究すべきテーマであると思いました。

2日目は、戸田先生の企画により、関西学院大学の橋本先生による海外学会への参加の仕方、子どものお片付け場面を取り上げた幼児の公平感の発達に関する研究発表をお聞きました。また、その中で分析に使われている POSA という方法についての説明も受けました。研究会に出席すると、また自分も頑張ろうという気持ちが高まります。

保育士の専門性としての感情労働のあい様について

兼 間 和 美 (四国大学 人間生活科学研究科 人間生活学科専攻)

この度、第19回感情労働研究会で、修論の中間報告をさせていただきました。研究会の大切な時間を頂戴できたことに、まず、感謝いたします。

私は、長年、保育士として公立保育所に勤務しておりました。そして大学院入学を考え、研究テーマを模索しておりました頃、諏訪先生はじめみなさまの著書であります『保育における感情労働—保育士の専門性を考える視点として—』に出会う機会があり、はじめは、少し抵抗を感じながらも、社会的にはネガティブ感情が優先している「保育」という職業に、自信と誇りを持っている自分に気づくことができました。そして、長年の保育実践を振り返り、自身が生涯の職業として選んだ「保育」という仕事は、なぜ、これほどまでに自らの感情コントロールが必要なのか、改めて問い直す良い機会ともなりました。

さらに、保育士の専門性としての「感情規則」が、習慣として身につけていること、保育という職業は、子どもの笑顔という報酬をいただける、楽しい職業であること。さらには、一般的に評価されているほど実践している保育士は大変な仕事ではなく、むしろ、子どもたちとの生活で保育士自身が癒され、子どもたちの成長を見守ることで保育士としての、喜びと自信を得ることができ、結果、自らの保育の質が向上するという、一つのプロセスがあると考えます。このことから、保育は「感情労働」であり、保育士は「専門性として、むしろ、感情労働を身につけることが必要である」と考えます。

今回は、修論の中間報告として、「保育とは」という部分と、あらゆる年齢の保育士のインタビューやアンケート結果を分析・考察した部分について、みなさまにご検討いただき、ご意見を頂戴し、今後の課題や研究内容を探る方向性を見出し、さらに研究を重ね、修論発表へとつなげたいと考えています。どうかよろしく申し上げます。

兼間さんの研究報告を聞いて

兼間さんは、公立保育園の副所長として勤務していた際、正規職員としての責務を果たすために11時間勤務をして頑張っていたという。猛烈な根性だけれど、そういう保育者の勤務条件を引き受けさせてしまうところに、保育者を縛る感情規則が強固に働いているのではないかと思った。それでも保護者には「おかえりなさい」「疲れたでしょう…？」とした手に出て声をかけ、気になる子どものことについては最後にさりげなく話をする……。ぐっと自分の感情を抑制して働き続けることが兼間さんの求める保育者自身の感情コントロールなのだろうか？修士論文で追及されている保育者の「感情労働」の認知度(アンケート調査)と意識しないでやっている保育者の感情コントロールの実態(ヒアリング調査)がきちんと重ね合わされて、保育者のあり方に対する社会的関心を喚起し、兼間さん自身の体験を明確に整理されるものとなることを期待している。(諏訪きぬ)

感情労働研究会に期待すること

前田 武司 (額小鳩保育園)

感情労働と出会ったのは、昨年10月に岡山県で行われた、全国私立保育園連盟主催の研修での諏訪先生の講義でした。その内容に感銘を受け、本年2月には石川県の保育所理事長・所長研修会に諏訪先生をお呼びしました。また、これが縁でこの9月にはいしかわ子育て支援財団が保育所嘱託医研修として先生を呼んでくれました。しかしながら、石川県はもとより、この概念はまだまだ保育現場に浸透していません。

当面の私自身の「感情労働」についての関心は次の2点です。

まず、「保育者の労働が見た目以上に如何に過酷かを証明することができるのではないか」です。世間では保育に対して未だに、一日中子ども遊んでいて楽しそう、といった類の誤解が存在しています。その労働の過酷さが、科学的に実証されることを期待します。もう一点は、「保育者の知識を深め、技術を高めることで、感情労働を克服することができるのではないか」です。保育の感情労働を大変にしている要因はいくつかあると思いますが、その主なものの一つは、子ども理解の不十分さとそれに由来する子どもへの対応の未熟さだと思っています。子どもの発達や心の動きの特徴を理解することで、その時々の子どもの行動に見通しを持って対応することができれば、余計な感情労働は不要になるはずです。

保育という労働が、世間から正しく理解され、保育者自身が少しでも余裕を持って楽しく子どもに関われようになる。そんな研究や実践が展開されることを楽しみにしています。

保育の感情労働研究会 感想

第18回 保育の感情労働研究会 in 仙台

「男性保育者の離職に関する研究」についての発表を通して

藤田清澄(盛岡誠桜高等学校 保育士専攻科)

2013年7月21日に宮城県仙台市にある宮城教育大学において行われた「第18回保育の感情労働研究会」の中で「男性保育者の離職に関する研究」というテーマで発表をさせていただきました。

今回の発表では、離職を経験した男性保育者1名のインタビューデータを基に、離職に至るまでのプロセスに着目して分析を試みました。自分の中では男性保育者が男性であるが故の葛藤や様々な想いを中心に描くことを目的に進めていた研究でした。しかし、今回発表をさせていただき、ご参加いただいていた先生方からのご意見・ご指摘を基に以下のような反省点・改善点が見出されました。まず1つ目は男性保育者に自分の中で限定してしまったことにより、男性であるが故の部分に着目していたはずが、もっと広い視点で見られるはずであった部分を男性であるからという視点に置き換えてしまった恐れがあるということです。先生方からご指摘いただいたことからその部分が自分の中で非常に問題があったのではないかと感じました。また、諏訪先生からご指摘いただいたように質的研究の本質的なところで「男性保育者」としてしまったが故に、今回の発表内容とテーマに違和感を生じさせてしまったという点も感じられました。

これからの本づくりについての提案

上月智晴（京都女子大学）

第19回感情労働研究会(大阪)において、「養成部門」からの出版計画を話し合いました。この企画についてはすでに第18回研究会(宮城)や、ML(7/27)で案を提案していました。内容としては柱が2つ。1章で保育学生が強いられる感情労働の問題(新たな共同調査も入れて)を、2章で養成校での取り組み・授業実践(主に遊びにおける感情労働に視点を当てて)をまとめ、ブックレットタイプの本として学生が購入しやすいものをイメージしています。

この日の話し合いで、具体的に執筆者・スケジュールを決めて動き出す見通しでしたが、ブックレットで収まりそうのないいろいろな要望・意見が出されました。「感情労働の『形』(表層)だけではなく、日常的な子どもとのいろいろなやりとりの中で行う保育者の子ども理解、感情操作、内面への気づきなどをていねいに取り上げてほしい」「学生が手に取って読むものではなく、教員が買って授業で活用できるワークブックにはどうか」「事例がたくさんあるものがほしい」「前回のようないシンポ形式で議論するの面白い」「養成校によって学生の質(モチベーション、常識等)がさまざまなので量的な調査は難しい」「共同調査は急いであるより、しっかりと練って時間をかけて精査してしたほうがいい」など…。とても活発な意見が交わされたのですが、結局時間切れでまとまらず(逆に広がってしまった?)。とりあえずの次の作業ステップとして、私がまとめた文献調査(「実習テキストに見る感情規則」)をもとに、議論をしてみようということになりました。もう少し文献にあたってから「トピック」としてまとめML上に話題提供したいと思えます。もうしばらくお待ちください。また同時に、今後に向けて研究会メンバーのみならず自身が、ほしいと思う感情労働の教材、教育実践レポートを提供していただく準備をしておいていただけると幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

これから何冊も本ができることを期待して

戸田有一（大阪教育大学）

- *『保育における感情労働』の良さ: ネット上の書評から多様な意見が個性的なまま提示されていることの良さが評価されている。多くの執筆者がシンポ形式で参加し、それを編集した努力の賜物。まず、この「多様であることを提示できる」本作りを今後も(「感情労働をすべし」という意見だけではなく「しなくてもいい」という意見も大事)。
- *『保育における感情労働』は、ディスカッション・スターターだった。すぐに結論ができるというようなものではなく、ディスカッション・ファシリテータがほしい。その本から、読者のあいだにシンポが展開していくような。(ゼミやグループでの卒業研究で、学生が活用できる。学生一人に1冊のイメージではなく、先生が1冊。ワークシートもあって、先生が他の授業でも使える)
- * 深さや高さのある「語り」の提示も必要。大勢の平均値や、多様な意見の羅列には、しかし限界がある(そこには、現状を変えていく力は乏しい)。兼間修論報告のなかのC先生のような語りを、加工しないで、残していく必要があるのではないか。(数値におとしての集計や、質的に分析する前のもの) やさしい語りだが、深く強い。
- * 以上をまとめますと「多様」「交換」「仰ぎ見る」がキーワードです。

被災地・巨理町を訪ねて

朝早く徳島を出発、香曾我部先生はじめ、みな様の待つ仙台駅にて合流。バスは巨理町荒浜地区に向けて出発。途中、香曾我部先生が「空港周辺は、何もなかったでしょう? なんもなくなってしまっ!」そういえば、飛行機がおもちゃのように押し流されていたのは、今さき自分が降り立った空港の2年前の3・11その日だったことを思い出しました。

巨理町荒浜支所で、語り部さん二人が同乗して災害の状況を説明。「やっと草が生えてきたんですよ。」「ここは、ため池じゃないんです、まだ、海水が引かなくて・・・。」道路を通りながら「ここから先は、帰りたい、家が建てられない。」

バスが走る両脇には、「除塩作業中」という「のぼり」が目にとまりました。

「今だに続く震災の後遺症。風評被害も全然なくなる! だからこそ、私たちは 震災を語り継いでいくことの意味を感じています。」そんな、語り部さんの力強い言葉が印象的でした。

参加してよかった、心からそう思いました。(兼間 和美)



宮城県・巨理町は、仙台市から南に約26kmの距離に位置し、西を阿武隈高地、東を太平洋の黒潮、そして北を阿武隈川に囲まれた平地。2011年3月11日震度6の地震と津波に襲われ、297名の人命と5,500棟が全壊・半壊の被害を受けた。

私は巨理町荒浜地区を初めて訪れた。震災後間もなくから現在まで、私は岩手県山田町での中高生の居場所支援に参加している。山田町に滞在する時は、今回視察した鳥の海ホテルに作業員の方々がそうするように、海岸沿いの停電したままのホテルで仲間たちと寝泊まりする。山田では中学生や高校生と何気ない会話をしたり、勉強を教えたり、ゲームをしたり、食事をしたりと、一緒に日常を過ごすことに価値をおいてかかわっている。震災の話に特別に触れることもない。子どもたちの保護者や関係者との会話も、自然と震災のことには触れてこなかった。だから今回のツアーは、被災した方の語りをお聴きする初めての経験となった。バスを降りた打ち解けた会話のなかで、語り部の方が「がれき」のことを「宝物」「私たちの宝の山」とおっしゃっていた。懸命に片付けられているのは「がれき」ではなく、無造作に撤去されている「残してきた大切なもの」であり、奪われた「生活そのもの」であるということに、私は気付けなかったし寄り添えていなかったと思った。香曾我部さんからうかがった当事者であるが故の複雑な思いや葛藤、周囲との関係の難しさなども併せて、これまで感じてこなかった震災の一部を考えるきっかけとなった。(小川晶)

編集後記

★自由闊達な雰囲気のある研究会: 当研究会は上下関係がなく、利害関係もないから、気楽に思ったことが言える。窮屈なご時世に何と貴重なことでしょうか! ? この自由闊達なおしゃべりの場から、「保育の感情労働」研究が深められて行きたらいいなあ...と思います。しかしそれが裏目に出ると上月さんの悲哀に満ちた報告のようになってしまいます。司会者がもう少し強権発動しては? でも自由闊達な雰囲気

は捨てがたいですね! ? 知恵を出し合って、確実にまとめる方向に舵取りする必要がありますね! ? また研究費を獲得する必要もありますね! ?

☆保育の現場は非常事態: 保育の感情労働の研究は遅々としているのに、保育の施策はズンズンと進められて、保育の現場はそれに対応するのに四苦八苦しています。2010(H22)年1月の「子ども・子育てビジョン」は、2014(H26)年度目標値を、待機児童解消を視野に、次のように挙げています。* 平日昼間の保育サービス215万人⇒241万人(3歳未満児の保育75万人=保育率24%⇒102万人=35%)、延長等の保育サービス79万人⇒96万人、認定こども園358か所⇒2000か所以上、放課後児童クラブ81万人⇒111万人、地域子育て支援拠点事業7100か所⇒10000か所、男性の育児休業取得率1.23%⇒10%...と信じられないくらい増設プランがズラッと並んでいます。片や保育現場は保育士不足。保育士資格をもつ人々に再就職を呼びかけても応じる気配は薄く、園の運営管理に当たる園長さんたちは人集めに四苦八苦しています。キャリアを積む暇もない保育者の下に置かれる子どもたちは大丈夫だろうか? チームワークのない職場で保育者たちのストレスは...? 問題山積みの現場を励ます研究をしたいですね!(諏訪きぬ)